



いのちのつながりを大切に

COP10「絵画・写真コンテスト」  
写真部門グランプリ 羽田正昭さん撮影

[特集]

# 多様ないのちのつながりを大切に 名古屋のまちづくり

COP10の精神をかたちに

## Contents

[特集] 多様ないのちのつながりを大切に 名古屋のまちづくり	1~3
PERSON	4
私のお気に入りの場所	4
なごやのまち今昔	5
まちづくり活動助成団体紹介	6
名古屋都市センター研究成果	7
都市センターだより	8



市民アンケートなどをもとに描いた「100年後の夢のなごやの姿」(「生物多様性2050なごや戦略」より)



成功のうちに幕を閉じたCOP10(写真提供:日本政府)

## 歴史的成果で「環境のなごや」を世界へ発信

平成22年10月に開催されたCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)は、多様な生態系の保全と持続的利用のための新しいルールを定めた「名古屋議定書」と、具体的目標を掲げた「愛知目標」の採択という画期的な成果を収め、幕を閉じました。開催都市名古屋の名は世界に発信され、歴史に名をとどめることになりました。環境を大切に、なごやのまちづくりは、COP10の成功によりさらに深みと広がりを見せ始めています。



## 【特集】多様ないのちのつながりを大切にする名古屋のまちづくり

### 持続可能な社会へ 「生物多様性2050なごや戦略」

COP10開催に先立ち、名古屋市は「生物多様性2050なごや戦略」を策定しています。生物多様性に支えられた持続可能な都市・名古屋を、市民とともに実現するための指針となるもので「身近な自然の保全・再生」と「生活スタイルの転換」の二つの観点からまとめられています。そこでは「自然に支えられた健康なまちの創造」「環境負荷の少ない暮らし・ビジネスの創造」など4つの戦略が示され、達成に向けた動きなども紹介しています。

環境を重視する名古屋のこうしたまちづくりには、市民の意向が強く反映されています。象徴的な出来事の一つが、1999年の藤前干潟最終処分場計画の中止でした。そして全国に範を示す先進的なゴミ分別収集、愛・地球博の開催など、市民、行政の連携による環境をテーマにした重要な取り組みが続きました。その土壌の上に花開いたのがCOP10の成功です。生物多様性という視点は、地域のまちづくりにもすでに大きな影響を与えつつあります。

※「生物多様性2050なごや戦略」に関するホームページ  
<http://www.kankyo-net.city.nagoya.jp/biodiversity/>  
<http://www.city.nagoya.jp/shisei/category/53-5-14-2-0-0-0-0-0-0.html>

#### 地域住民の取り組み

### 人、魚、植物が共生する 「環境用水」をめざして

名古屋市の北部から南西部へ流れる庄内用水は、庄内川の水を農業目的に限って利用できる農業用水です。そのため農閑期となる秋から春先にかけて通水を止められ、水の溜れた底部は汚臭漂うごみ捨て場と化していました。この問題を解決するため、地元住民らは2004年に「庄内用水を環境用水にする会」を結成。水利権を農業目的に限定されないよう、環境用水という新しい位置づけで通年通水を国や市に働きかけてきました。

同会は3万人の署名を集め国、市に提出するとともに、地元住民による一斉清掃、用水を使った防災訓練、通水が止まる直前に魚をすくい出し庄内川へ放す「魚をすくう会」、桜ウォーキングなど、環境用水にふさわしい住民参加の取り組みを進めてきました。その結果、下水の再生水を使い、2010年12月14日の「通水式」から通年通水が実現することになりました。国が所管する庄内川の水利権に例外を設けることは困難で、再生水の利用なら市単独の判断で行うことができるからです。

同会は、この活動により名古屋市から都市景観賞を受賞。さらに光音寺公園（庄内用水）が、せせらぎや植生の再生を図る「水の回廊モデル事業」の第1号に指定されました。これは緑の保全・



庄内用水「魚をすくう会」の取り組み



通水中の庄内用水は、住民の憩いの場所



「水の回廊モデル事業」の第1号に指定された光音寺公園と庄内用水の整備イメージ

創出を図る「緑の回廊」形成と一体となり、自然や生き物の恵みを活かしながら名古屋の再生をめざす試みです。環境用水への取り組みは、住民と行政が連携する生物多様性を視野に入れたまちづくり事業へと、さらに進化することになりそうです。

## 民間企業の取り組み

# 市民農園、出前講座などで地域再生めざす

名古屋市中川区で土木建設業を営むY社は、自らを「まちづくりのプロ」と位置づけ、本業とCSR(社会貢献活動)の両方で環境活動に積極的に取り組んでいます。本業では環境負荷の少ない工法を研究、実践。CSRでは「なごや環境大学」「環境パートナーシップ・CLUB」で環境にやさしいまちづくりなどをテーマにした出前講座を実施、運営のサポートも行っています。

また「自ら耕す建設業者」として「市民農園事業」にも参画しています。これは市民、企業、行政の協働事業で、市、地元建設業者が提供する用地を建設業者が農園として造成管理、市民が農作業に参加。農作業を楽しみながら、都市の緑化や土、水、植物、生き物、食の循環を意識した環境活動の拡大をめざすもので、すでに天白区、緑区など4農園で伝統野菜などの栽培が行われています。同社は、こうした地域再生事業に取り組みながら、地域から本当に必要とされる企業としてまちづくり事業を進めていこうとしています。

ほかにも地域住民、市民団体、企業などが、さまざまな角度から環境をテーマにしたまちづくりに取り組んでいます。例えば企業による「間伐材プロジェクト」は、上流域の間伐材を使った商品の販売を通して持続可能な商業流通と環境保全をめざしています。市民団体、専門家、行政が連携して行っている「名古屋ため池いきものいきいき計画事業」ではたくさんの調査員が継続的なデータ



建設業者が造成管理し、市民が農作業を楽しむ「市民農園」



環境にやさしいまちづくりについて説明する、民間企業による出前講座

収集を行い、生物多様性の情報交流につなげようとしています。そのほか里山、河川、郊外、都心の各地で多くの人々が生物多様性に関わりの深い活動を続けています。

## なごや環境大学 「環境首都なごや」をめざす「共育」と「協働」のネットワーク

「環境首都なごや」をめざし、学びと人の輪を広げるネットワークが名古屋にあります。市民、企業、大学、行政などの協働によってつくる「なごや環境大学」です。環境に興味のある人なら子どもから大人まで誰でも参加できます。運営は市民団体、経済団体、大学、行政などからなる「なごや環境大学実行委員会」。

講座は自然環境や暮らし、持続可能な社会、まちづくりなど多岐に

わたり、テーマを市民や企業から募集し、共に学び合い、育て合う「共育」の形をとっているのが特徴です。学びの場は里山、水辺、工場、教室などで、まちじゅうがキャンパスです。

問い合わせ先 ▶ 「なごや環境大学実行委員会」事務局

TEL/FAX : 052-223-1223 URL : <http://www.n-kd.jp/>

## この地域が生物多様性保全のお手本になってほしい

生態系保全と持続的利用のためのルールを定めた「名古屋議定書」などを採択したCOP10は、地球環境の歴史にとって重要な会議となりました。成功の背景には、大きな危機感があります。種の減少と生態系のかく乱は、もはや危機的状況なのです。フィールドワークの中でそれを痛感してただけに、とりあえず安堵したというのが正直な感想です。

東海地方は生物多様性の宝庫です。固有種が豊富な上、

愛知学泉大学コミュニティ政策学部 教授(動物生態学)

矢部 隆さん

東西の境界としての特性もある。里山、湿地、河川、海など多様な生き物の生息地にも恵まれています。しかしこの環境を活かせていない。多様性保全の取り組みも個別的で、市民パワーを結集できていない。名古屋に「生物多様性センター」が必要です。情報、標本などを集積、分析、発信し、保全活動の拠点になるようなセンターです。COP10の成果には胸を張っている。しかし、大切なのはこれからです。この地域が生物多様性保全のお手本になってほしい。

